

筑波大学日本文学会会報

第17号

1993年2月

研究雑感	……………	名波弘彰	一
日本文学会だより	……………		三
研究室だより	……………		四
教官新刊紹介	……………		八
卒業生だより	……………		九
日本文学会教官学生名簿	……………		十三

研究 雑 感

名 波 弘 彰

ある事件が起ったとき、それを目撃した者の語ったことが事実と呼ばれるとされている。しかし現在では必ずしもそうとはされないようだ。語るといふ行為そのものは物語行為にすぎないからだといわれる。そうかもしれない。事件の当事者のあるふるまいをどう見たかというところにはすでに目撃者の解釈が含まれているのであって、したがって当事者の行為の連続を物語るといふことになれば、解釈が解釈を生じさせることになり、もうそこにはフィクションを豊かに内包する物語が語られているのである。

こうして目撃者談（近似事実）から事実を判断・認定する作業は、事実を根拠とする学問では必須の研究過程となる。だが、文学とりのわけ伝承論ではそうではない。事実の構成よりも物語の形式そのものが対象となる。目撃者談が語り継がれる過程で、他の事実、あるいは文化要素と結びついてゆくことで、伝聞（伝承）が形成される。伝承論の対象はこの継起過程の豊かさに求められる。物語る形式を機制するのは、もちろん構成されて存在した事実に拠るのだが、そこに語りを媒介に思惟の形式が大きく関与する。そしてその思惟の形式をなしたしめるのが時代の精神的枠組であって、文学史のジャンルという物語のあるもの（ある部分）は本質的には伝承論の好個の対象となっている。

元暦二年（一一八五）三月末、源平両軍による寿永・元暦の内乱も最後の局面を迎えていた。長門国壇浦の合戦は瀬戸内と熊野の水軍を味方につけた源氏軍が圧倒的な勝利を収めつつあった。平清盛室の二位尼に抱かれた八才の幼帝の入水という悲劇はそんななかでおこった。これが『平家物語』でいう「先帝入水」であるが、この事件は、『平家物語』の諸本や『閑居友』などで三種の報告（伝承）が伝えられている。三種の異伝は主に二位尼のふるまいにかかわっている。

そのひとつは、長門本・盛衰記の、いわゆる建礼門院の回顧談と呼ばれるもので、それによると、二位尼は幼帝に「是はいづくに行かんずるぞ」と尋ねられると、「夷兵ども御船に矢を参らせ候へば、御船異に（異御船に―盛）行幸なし参らせ候」と言い果てぬうちに海に身を投じた、とある。二つめが延慶本の壇浦合戦の伝えで、二位尼は不安がる幼帝をなだめすかすと、「王城ノ方ヲ伏拝給テ」「南無帰命頂礼天照大神正八幡宮」と神に呼びかけるや、次のように「クドカレ」る。そもそも幼帝は「何ノ御罪ニ依テカ百王鎮護ノ御誓ニ漏サセ給ベキ」。しかしもはやいかんともしがたい。そこで二位尼は悲嘆をひるがえして幼帝の後世安穩を「大日遍照弥陀如来」に祈るや、海へと飛び込んだ。

そして三つめが『閑居友』や延慶本の建礼門院説話群の回顧談で、二位尼は「先伊勢大神宮ノ方ヲ伏拝奉り給テ、（次に）西ニ向テ」神がみに訴えかけたと伝える。一方系諸本になると、これが「まづ東にむかはせ給ひ、伊勢大神宮に御いとま申させ給て、其後西方浄土の来迎にあづからんとおぼしめし、西にむかはせ給て」というように、よりパフォーマンスが大仰になって悲劇性を強調するようになる。

この三つの伝えを文化要素の結びつきという観点から捉えると、ひとつめはなしと行ってよからう。それに対して二つめには石清水八幡信仰、三つめには伊勢宗廟思想が結びついていると考えられる。このうち二つめの石清水八幡信仰は、どうやら時代も限定でき、背景となる宗教基盤も特定できそうである。というのは、その二所宗廟思想を背景としたころの八幡大菩薩による百王鎮護思想は、建久元年（一一九〇）十一月七日に上洛した源頼朝が九条兼実らに語った「八幡御託宣」に始まり『玉葉』、『安居院唱導集』や『拾珠抄』など天台系の唱導僧に担われたが、土御門院の皇統（後嵯峨天皇→後二条天皇）はことに「二所宗廟」の八幡信仰に篤ったといわれる（『八幡愚童訓』甲本）。とりわけ注意されるのは、後二条天皇の在位が延慶元年（一一三〇）までで、延慶本書写年代（延慶二年）と接することであろう。

こうして二つめの伝承の背景はどうか捉えられ、そこにこめられた八幡信仰がどのような意味をもつのかといったことに関心に向けているところだが、そうすると一層もどかしいのは、三つめの伝承の伊勢宗廟思想があまりにも普遍的でありすぎるために、いまだ十分に捉えきれないことである。これをどう攻めるかが目下の課題となっている。